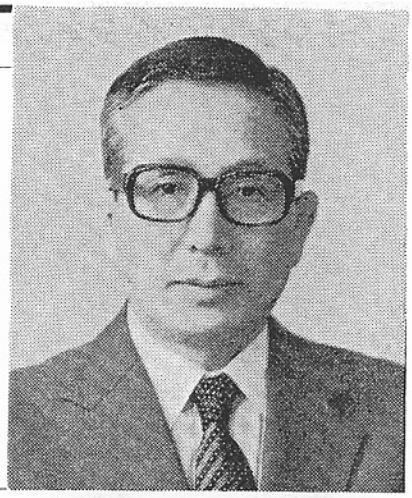
会長あいさつ

学会設立30周年に寄せて



鶴田禎二

昭和26年12月2日．この日は本会がその前身である財団法人日本合成繊維研究協会(昭和16年1月設立)および財団法人高分子化学協会(昭和19年2月設立)を引き継ぎ，社団法人高分子学会として発足した日であります．設立以来，本会は高分子科学と工業の発展を期し幅広い学会活動を展開してまいりました．とくに本会の著しい特徴は，理・工・医・農などの諸分野にわたり，インターディシプリナリーな産・学・官の協力態勢の推進に大いに寄与してきたことであります．これはひとえに優れた諸先達の識見と洞察におうものであり，私どもは改めて敬服の念を深くしています．

学会活動は本来連続的なものではありますが，設立10年，20年，30年，… と節目に当たって学会のあり方を会員の皆様とともによく考えてみることは有意義であると思われます．本会が発足して約10年の間，つまり1950年代には，画期的なZiegler-Natta触媒の発見をはじめ，撩乱の開花が高分子の諸分野において妍を競いました．しかし，展開期の1960年代も後半以降になりますと，環境問題への対応あるいは量から質への転換など，数々の要請がきびしく迫ってまいりました．ちょうどその頃，本会は設立20周年を迎えたのです．記念事業の一つとして特集“現代の高分子”が一年間にわたって「高分子」誌上に連載されたのは1971年から72年にかけてのことでした．この特集は第1部「高分子とは何か」，第2部「高分子工業のあゆみ」，第3部「未来に期待されるものは何か」の三部作からなる大型特集でした．とくに第3部「未来に期待されるもの」では「モレキュラーデザイン」，「高分子と生体（上，下)」，および「高分子工業の将来」が座談会形式で編集されており，10年後の今日興味深い読みものになっています．1973年のオイルショック以降さらに深刻化した客観情勢の下において，地味ではあるが，着実な進歩が高分子の分野で続けられてきました．中でも，生体や情報関連の分野では，基礎科学および工業の両面において，現在を10年前の状態に比べますと，実に格段の開きが感ぜられるのであります．とくに目をみはらせるのは研究・開発の仕事が日を追ってますますインターディシプリナリーになりつつあることです．これこそ，わが高分子学会設立時の理念でありまして，本会の役割はこれからさきも，ますます増大するものと確信しています．

設立30周年を契機とし，本会が学会活動をさらに振興して斯界に貢献するために，本会では設立30周年記念事業委員会を設けて計画案を練ってまいりました．この計画案を昨年5月の高分子学会通常総会において皆様にご承認いただき，同年6月以来会員の一人，一人にご理解とご協力とをお願いしてまいりました．すでに，いろいろな機会で申し上げましたように，30周年記念事業では次の三つのテーマを活動推進の柱としています．

1. 高分子の普及と若い人材開発
2. 基礎科学の振興と産学官研究協力機構への寄与
3. 国際交流活動の推進

これら3本の柱を通して，本会は高分子科学と工業の今後の新しい展開に貢献できるよう最善をつくす所存でございます．

すでに多くの正会員ならびに法人会員におかれましては，諸般の情勢が非常にきびしい折にもかかわらず，この記念事業計画に対し深いご理解とご協力を賜わりましたことを厚く御礼申し上げます．しかし，現段階ではまだ，募金活動にご参加していただいてない会員もかなり多数おられ，私どものキャンペーンに対する努力不足が痛感される状態にあります．ご理解とご協力の程を重ねてお願い申し上げる次第でございます．

Teiji Tsuruta，東京理科大学工学部（162 東京都新宿区神楽坂1-3）教授・東京大学名誉教授・工博

＜略歴＞ 昭和16年京都帝国大学工学部工業化学科卒業．17～20年兵役，39年まで京都大学にて助教授，教授を歴任，39～55年東京大学教授，55年より現職．55～57年本会会長．